研究課題　幕末維新期における民衆生活の改変と信心の歴史的転回に関する調査・研究

研究経費　五六万四〇三九円（前年度よりの繰越分を含む）

研究組織

　研究代表者　　　奈倉哲三（跡見学園女子大学、以下Ａ）

　所内共同研究者　石津裕之・杉本史子・箱石大

　所外共同研究者　小田真裕（船橋市郷土資料館、以下Ｂ）・児玉憲治（千葉県文書館、以下Ｃ）・千葉茉耶（野村胡堂・あらえびす記念館、以下Ｄ）・斎藤悦正（本郷中学校・高等学校、以下Ｅ）・芹口真結子（岐阜大学地域科学部、以下Ｆ）・清水有子（明治大学文学部、以下Ｇ）

研究の概要

（１）課題の概要

　近世の民衆は各地の日常的な生活のなかに「信心行為」を抱え込んでいた。幕末期において、その信心は社会変動の一環として大きく歴史的に転回する。その転回は、維新期においては権力的な改変によるものも大きいが、民衆自身が自らの生活を改変していこうとする苦闘のなかで、信心を転回していく動きとしても生まれていた。従来、「幕末民衆宗教の誕生」といった括りでは捉えられていたこの歴史事象を、ごく普通の生活を営む民衆が地域生活を改変させるなかで、信心をも転回させていた現象として、史料から解明する課題が本共同研究の根底にある。この根底の課題を果たすには、各地の多様な信仰の実態を、地域生活が具体的に判る史料とともに解明することが必須である。本共同研究の直接的な課題は、この根底の課題に寄与し得る史料が、どの地域にどのように存在しているかを目録の状態を含めて具に調査したうえで、その史料研究成果を社会に発信することにある。

（２）研究の成果

　A:安政六年、多摩川堤防決壊による九ヵ村用水冠水に対し、用水普請でも今回の用水普請は公儀普請とすべしと要求する拝島～柴崎九ヵ村の地域共同体の力が解明された。普済寺文書中、文久二年の雨安居に関する冊子六冊から、普済寺での「雨乞祈禱」の内容が詳細に判明した。長沼家文書中、遊行上人御用日記から、藤沢遊行寺での調査が新たな課題となった。小川家文書一〇三六点の仮目録を作成する準備が整った。B:平田篤胤門人の宮負定雄・大原幽学門人の椎名旋蔵と縁戚関係を有する金杉佐久治家文書中に嘉永年間の気吹舎出版物を確認。また、開披不能文書を業者委託で開披し、地域における大原幽学門人の実践がわかる史料を翻刻し、記念館に提供した。C:下奈良・中奈良両村が所属する奈良堰用水組合の基礎的な事実関係が判明した。飯塚家が名主を勤める下奈良村依田氏知行所で費用の立て替えや割付などを通じ、用水組合のなかで下奈良・中奈良両村の関係が判明してきた。また中奈良村に限れば、用水利用の前提となる土地所有関係が時系列的に再現できる可能性も出てきた。D:旧修験宮崎家所蔵資料には、近世だけでなく、明治・大正期の史料も多数含まれている。特に宮崎求馬は明治以降、紫波郡内一四社の社掌も務め、常駐神職のいない小規模神社や地域住民が管理する村社の動向が窺われる。E:村内百姓の菩提寺は曹洞宗長林寺一か寺のみという特色。宗門改帳・過去帳・施餓鬼過去帳・祠堂金借用証文などから、家格が反映される戒名や施餓鬼寄付などを検討していく。F:東本願寺家臣粟津家「粟津日記」は慶応元年～慶応四年までの記事が収録。粟津家に奉公する下男下女の奉公記事には出身国・檀那寺記載があり、北陸や美濃国などからも百姓身分の者が奉公に出ていることが判明。檀那寺宗旨も東本願寺だけに限らず、浄土宗など他宗派も確認できた。東京大学史料編纂所貴重書「修史局雑綴」は修史局からの教部省組織に関する問い合わせへの回答を記したもの。G:東京大学史料編纂所所蔵貴重書から、幕末の浦上キリシタンに関する文書を選定、「外務省引継書類」四点、「維新史料引継本」一点の撮影を業者委託した。長崎純心大学博物館所蔵キリシタン関係史料のうち、浦上潜伏キリシタンに関連の書付・書状・オラショ本などを撮影。長崎歴史文化博物館所蔵史料のうち、浦上村山里庄屋高谷家関係史料のほか、安政四年・万延元年・慶応三年の長崎奉行所の御用留、浦上崩れ時に長崎奉行所が作成した調書などを調査。安政年間の「口上書」には「物真似手踊り」願の写が多数含まれ、史料分析を進めた。  
 上記調査活動について、各人は毎回「調査概要報告書」を全員に報告、認識を共有し、活発に意見交換した。特にAとCは用水組合下流村落による指導権と責任について議論。Dが進めている目録作成については、A・B・Cが具体的な提言をおこなうなど、援助・協力体制を組んだ。またEの曹洞宗寺院と村落、Fの粟津家奉公人問題、Gの浦上キリシタン地域での安政期の「手踊り史料」などについて、それぞれAと意見交換するなどして、地域と信心問題を共同で深めてきた。